会　報　第12号

1992.3
日本家庭科教育学会
中　国　地　区　会

目　　次

新しい男女共学家庭科の研究・実践支援ネットワークの確立を　（中国地区会会長）田結庄順子…1
第11回日本家庭科教育学会中国地区会研究発表会並びに総会，講演会報告……2
1. 総　　会
2. 講　演　会
3. 研究発表会
講演会「感性を育む家庭科教育について」……広島大学教授　片岡　徳雄…4
《研究室から》……多々納道子…6
《学校現場より》……宮川眞利子…7
《研究発表要旨》……8
本部だより
事務局だより
編集後記

新しい男女共学家庭科の研究・実践支援ネットワークの確立を

中国地区会会長　田結庄　順　子

この春から，新しい教育課程が小学校でスタートします。来年4月からは中学校で，4領域男女共通必修の技術・家庭科が実施，再来年4月からは高等学校で男女共通必修の家庭科が実施されます。

まさに，今年は家庭科の歴史にとって，忘れられない画期になるわけです。画期にふさわしい研究や実践は，今まで積み上げられてきていますが，それをいままでの経験のみで捉えるのではなく，1990年代という時空の中での男女共学家庭科の実施の意味を，しっかりと捉えて研究・実践していきたいものです。

つまり，長い間，女子のみを対象としてきた主婦準備教育としての家庭科は，1970年代の後半に，理論上はもはや克服され，それにともなって，男女共生時代にふさわしい教科観と教育内容をもった新しい家庭科理論の構築が試みられてきました。その過程で家庭科教育研究者と実践者は，それこそ努力をしてきて，今日のような状況を実現させてきたわけです。1980年代に本格化した国民生活の質的変化と家庭科の教科観の転換は，従来の家政学の学問内容の見直しを迫り，生活者の立場を考慮した名称や研究・教育の内容への転換が余儀なくされ，こんにちまでその検討が多方面で試みられてきています。

そして，いよいよ，新たな男女が学ぶ家庭科の時代がはじまります。新たな教育課程の実施に当たり，つねに，「教えるに値する教育内容を，学ぶに値する教材で」という授業の原理に留意し，新しい男女共学家庭科の研究・実践支援ネットワークづくりの確立を当地区会の今年の目標といたしたいと思います。

その点からも，共同研究に多くの会員が参加され，実のあるものにすべく，願っています。

第11回　日本家庭科教育学会中国地区会研究発表会並びに総会，講演会報告

第11回研究発表会，総会，並びに講演会が平成3年8月24日(土)広島大学教育学部で開催され，準備校の多大の御援助により，すべて盛会裡に終えることができた。

1　総　会（13:00〜13:30）

1）開会の辞（岩垂　芳男）

2）地区会会長挨拶（中間美砂子）

3）実行委員長挨拶（古田　幸子）

4）議長選出（佐藤　一精）

5）議　　事

【報告事項】

①　平成2年度庶務報告（伊藤　圭子）

年月日	行　　事
平成3年6月	役員改選（役員候補者推薦）
平成3年7月5日	第11回　日本家庭科教育学会中国地区会研究発表会並びに総会プログラム発送（全会員宛て）
平成3年7月13日	役員会開催（共同研究推進及び会長候補者推薦等　於　広島大学学校教育学部）
平成3年8月24日	役員会開催（於　広島大学教育学部）
平成3年8月24日	第11回　日本家庭科教育学会中国地区会研究発表会並びに総会開催（於　広島大学教育学部）
平成3年10月5日	共同研究委員会開催（於　岡山大学）
平成4年3月	会報第12号及び名簿発行，発送（全会員宛て）

②　平成2年度会計報告（望月てる代）

③　平成2年度会計監査報告（友定　啓子）

④　平成3年度役員選出結果報告（中間美砂子）

【協議事項】

①　平成3年度事業計画案の審議 ― 可決された。

共同研究は「生活環境にかかわる領域の教材開発と授業研究」が実施されることになりました。テーマおよび詳細は別掲のとおりです。

【共同研究】

1　テ　ー　マ

生活環境にかかわる領域の教材開発と授業研究（ここでいう生活環境は広義にとらえ，範囲としては，身近な環境，より大きな環境を含み，内容としては，人的・社会的環境，物的・自然的環境を含むものとします。）

2　組　　織

全体構想により，小学校，中学校，高等学校別に内容についての研究領域を設定し，その上で，県ごとに分担する。

3　研究計画

基礎的研究…平成3年10月〜平成4年3月

授業実践…平成4年4月〜平成4年10月

執　　筆…平成4年11月〜平成4年12月

印　　刷…平成5年1月〜平成5年3月

4　印刷費

予算案にしたがい，積み立て資金をこれにあてる。

②　平成3年度予算案の審議 ― 可決された。

③　平成3〜4年度役員の承認が下表のとおりなされた。

役職	所属	氏名	備考
地区会長	鳥取大学	田結庄順子	留任（前地区副会長）
地区副会長	広島大学	福田　公子	新任
	島根大学	多々納道子	留任（前監事）
監事	岡山大学	笠井八重子	新任
	山口大学	友定　啓子	留任（前監事）
庶務	鳥取大学	堤　伸子	新任
会計	鳥取大学	大沢　仁絵	新任

④　平成4年度大会開催について（笠井八重子）

準備校は岡山大学教育学部に決定。平成4年8月22日(土)午後に開催することが承認。

6）閉会の辞（岩垂　芳男）

2　講演会（13:30〜14:50）

題目「感性を育む家庭科教育について」

講演者　広島大学教授　　片岡　徳雄先生）

3　研究発表会（15:00〜16:45）

（座長　田結庄順子）

①　Lake Placid Conferencesにおける中等学校のカリキュラム構想

広島大学大学院　森　　尚子

②　高等学校消費者教育内容の実態分析

－環境教育の視点より－

広島大学大学院　今村　祥子

③　学校教育における消費者教育の課題

－「権利を主張する消費者」の再確認－

山口大学教育学部　小島　郷子

（座長　杉原　黎子）

④　高等学校「家庭生活」領域に関しての授業研究－「家庭の機能と家族関係」を，より具体的に理解するための試み－

山口芸術短期大学　砂田　京子

⑤　中学校家庭科「私の成長と家族」の授業開発

岡山県赤磐郡
吉井町立吉井中学校　福圓　恵

（座長　多々納道子）

⑥　青年前期における親子相互作用

広島文教女子大学短期大学部　長石　啓子

⑦　アメリカ家政学会誌における障害児教育の動向

広島大学学校教育学部　伊藤　圭子

平成２年度日本家庭科教育学会中国地区会決算

（自　平成２年４月１日
至　平成３年３月31日）

《収入の部》

（単位：円）

費目	予算額	決算額	摘要
前年度繰越金	65, 043	65, 043	
地区会費	100, 000	111, 000	1, 000×111人分
本部からの還付金	46, 200	43, 575	525×83人分
教大協からの補助金	40, 000	20, 000	
雑収入	2, 000	1, 882	利子
寄付	－	40, 000	地区会10周年への御祝
合計	253, 243	281, 500	

《支出の部》

（単位：円）

費目	予算額	決算額	摘要
総会費	70, 000	50, 000	
共同研究補助金	50, 000	57, 950	
通信費	20, 000	42, 912	共同研究報告書郵送費を含む
事務用品費	2, 000	875	
会議費	10, 000	9, 100	
印刷費	50, 000	48, 000	会報
雑費	5, 000	2, 013	消費税
10周年記念事業費	30, 000	57, 552	記念誌，記念品
予備費	16, 243	0	
次年度繰越金	－	13, 098	
合計	253, 243	281, 500	

特別会計（共同研究補助金）

《収　入》　積立金　昭和63年度　50, 000
平成元年度　100, 000
平成２年度　57, 950
預金利子　8, 350
合　計　216, 300

《支　出》　共同研究報告書印刷費　216, 300
（内　消費税　6, 300）

《残　高》　0

平成３年度日本家庭教育学会中国地区会予算

（自　平成３年４月１日
至　平成４年３月31日）

《収入の部》

（単位：円）

費目	予算	摘要
前年度繰越金	13, 098	
地区会費	120, 000	会員数×0.8人分
本部からの還付金	43, 575	525×83人分
教大協からの補助金	40, 000	
共同研究報告書売上金	89, 000	
雑収入	2, 000	
合計	307, 673	

《支出の部》

（単位：円）

費目	予算	摘要
総会費	70, 000	
通信費	40, 000	共同研究報告書送料，役員改選費を含む
事務用品費	2, 000	
会議費	20, 000	
印刷費	80, 000	会報，会員名簿，封筒の作成
雑費	5, 000	
予備費	10, 673	
共同研究基金	80, 000	積立金とする
合計	307, 673	

感性を育む家庭科教育について

広島大学教育学部教授　片岡　徳雄

私はかつて福山分校で家政科の先生方と一緒に勤務したことがあり，また一昨年教育学部の統合移転による機構の整備にあたり，家政科教育について相談を受け勉強する機会がありました。家政科教育は大変将来性のある学問でありますが，今は難しい問題をかかえていることを肌身に感じて勉強いたしました。

本日は一番ケ瀬康子先生の教科書からのコピーを資料として，感性ということについて次の順序で話したいと思います。まず，家庭科に限らず現代の青少年に感性が欠落していること，次に感性をめぐるキーワードの整理，最後に感性をどのように育むかという指導論について申し上げたいと思います。

この頃の大学生は「大学教授を殺すに刃物はいらぬ。私語と卒論あればよい」また「教室の前は聴く人，中寝る人，うしろ私語して騒ぐ人」という標語にみられるような状況にあります。社会的感性の欠落とでも言いましょうか。教師との関係をパーソナルな人間関係として捉えていないし，知識はよく整理して知っているのに意欲がないと言いましょうか。社会でも病院に行きますとあちこち回されてヘトヘトになるほどで，きちんとコンピューターで分析しないと診断してくれない。昔のお医者さんは，人間の全体像を診て，キャリアによる総合的な知見で判断していました。

寺内定夫氏が，『いま幼児の感性が危ない』という本を出されています。幼稚園児に目隠しをして答えさせると，オレンジをトマトとか，大根をじゃがいもとかいいますし，さらに匂いとなると，オレンジを「ああ，香水の香り」とか大根を「あっ，石けん」とかいう。こんな状態では，「人権教育とか生命教育などと言っているけれども，実感として細やかな命，弱い生命を大切にしようという気持ちが生まれるであろうか」と心配されています。全く同感するところです。

このような社会的感性の欠落は，日常生活・家庭生活・近隣生活における実感をぬきにして，いろいろな知識や情報がつめこまれていることから起こってきていると思うのであります。「触れ合いのない社会」となった高度経済成長期，東京オリンピック以降から子どもが変わってきたと言います。成長の過程で，シグニフィカントアザーズ(significant others)という，自分が人間形成をする上で重要な他者（親・先輩・担任の先生など）の触れ合い，哲学的には出会いというものがなくなってきていることが根本にあると思います。

しかし，一方では若者の感性を誉めたたえている連中もいます。都会的感性がビジネスと直結しているのです。

では，感性および情操とは何か。これを定義すると「感性とは，価値あるものに気づく感覚」であり，「情操とは価値あるものを追い求める態度」となります。どう気づくかという人間の働きかけは，社会的なものであると同時に個性的なものであることを強調したいのです。価値あるものと言っていますので，芸術的な感性・情操にしばられていないところが妙味です。ここで価値というのは，カントのことばに従えば真善美ですが，いろいろの領域で追求できます。例えば論理的な知性，人間関係的な良さ，倫理的な領域，美的なものの形，根本的で絶対的な聖など。今ごろは富とか権力をあげる人もいます。これらのいろいろな価値領域でどういう実践をするかというと，音楽や美術の感性と科学の感性がセパレートではない。ある物理学者が「自分は公式の発表の時，形が悪いとおかしいと思うことにしている。」と言っています。つまり，美的でないものには真実がはっきりしない。感性というものはトータルなものだと感じました。

現在学習指導要領の新しい方向のキーワードは，個性・自己教育力・豊かな心・国際社会における主体性・表現・体験・観察などすべて感性と情操にかかわっています。価値あるものと気づくには

非常に主体的な豊かな心との関係があり，個性的なものである。情操を追い求めるということは，自分にはねかえってきて自己教育力となるのではないでしょうか。

これに関連して創造ということも，感性とか情操と関係する大切な概念であります。知識は多くても創造性が足りないといわれます。初代の南極越冬隊長の西掘栄三郎氏のいう５つの条件すなわち①窮すれば通ずる　②時に非常識に考える　③連想，類似，アナロジー　④着想をデーターで確かめる　⑤失敗を恐れず追い求める。この５つの体験を研究などの創造的な仕事では，必らずしているのです。

家庭科で問題になる心像，イメージ，体験，想像等のことばも感性や情操の周辺にあります。心像はイメージ，想像はイマジネーションの訳で，心像は心に描くこと，想像というのはその絵の組み立てなのです。これらがあって，表現ができるのです。生活科あたりで表現とか体験をさせることは，感性を大事にしていることにつながります。ロバート・フルガムが「人生の知恵のすべては，幼稚園の砂場に埋まっている」といっていますが，幼児期の体験が知恵の重要な基礎を育んでいるということでしょう。家庭科は，感性的な体験を基礎にして，論理的に問題を解決していって，本当の知恵が生れる，という教育ですね。それを偏差値に関係ないから周辺教科という言い方をしているために，人間を人間と思わない新人類が出てきたといってよいのではないでしょうか。感性や情操を耕す学力構造をイメージしていただきたいと思います。

以上をまとめて，感性があり情操の豊かな人間はどんな特長を持っているかを申し上げます。①好奇心がある。②直感力，カンがいいということ。③非権威主義である。④やわらかさ，早さ。⑤自発的。⑥ねばり強さ，一貫性。⑦真面目さ，謙虚さ。⑧他人に対する思いやり。⑨喜び，楽しさ。⑩個性。心理学では「個性とはその人の求めるものである」と定義しています。その人の求めているところに個性があるというのです。

それでは実際にどのようなことを考えていったらよいのか。10項目ほど申し上げます。

まず第１に観察を大事にということです。虚心坦懐に心を虚しくして観察することを力説しています。昔「田の神様に聞いてこい」とよく言ったものです。田圃にしょっちゅう行って田圃の状況を見て，今日は昨日と違っているところはないかと変化を感じ，稲の生育にすぐさま対応するようにすることをこう言ったのです。固定観念に捉われず，おやと感じたことを大切にすることです。そこにはアバウト（about）なところがあり，それが人間とコンピューターと違うところです。割り切れないところに創造の芽があるということで，観察とは変化に学ぶ，変化を見つけるということでしょう。

第２に感覚を大事にする話し合いをする。授業の討議をする時に，理由とかデーターをつけることにこだわる傾向がみられます。家庭科でホームプロジェクトの問題を見つけるという場合にも，授業で学んだことを家庭の中に置き換えるという発想がみられます。そうではなくて，家庭生活の中で感覚でおさえた問題を出発点にすることをもっと大事にされたらよいと思います。

第４にヒントを与えてイメージを広げるということです。我々はすぐ固定化する傾向がありますが，これはいけません。こんなところを調べたらどうだろうというようなヒントで子ども達が動いていくというような指導がほしい。何でも答えが出ているところを求めるのではいけません。

第５にお話づくり。家庭科ではどうでしょうか。私は，食生活上あるいは住生活上の問題場面をこう決めておいて創れというのではいけません。まずい例を申しますと，国語で鳥獣戯画の連続した場面を渡して，各々の場面のお話を創れというのでした。そうではなくて各々別の場面をつなげて創ってご覧と言いますと，子どもは思考を働かせて構造を考えて創るのです。家庭科の場合も，ルポタージュではお父さんやお母さんの名誉が傷つ

くという場合もありますので，空想とか理想などのフィクションでいいのではないでしょうか。

第６に劇表現，劇化する。これは，国語や道徳およびホームルームなどではよくやります。劇表現は非常に総合的な表現であります。家庭生活のところで劇表現でやられているのがありました。たいへんよい事ですね。

第７にプロジェクト法です。これは特に強調したいものです。イギリスやアメリカでは盛んで，創造的態度をつくるには一番効率がいいと言われています。例えば小学校１年生の子どもが，お父さんがフランスに出張して近親感をもって，フランスというテーマでプロジェクトをしている。フランスの郵便切手やパリの交通案内やチョコレートの紙など何でも大学ノートに貼りつける。つまり，彼女なりのデータを収集したプロジェクトなのです。また，中３の女生徒の場合，歴史でシャフツベリー卿というテーマで200頁をこす論文を書いたといいます。家庭科では，そういう材料はふんだんに有るので，それをプロジェクト法でやってみるのは大変よい学習法であり，人間形成あるいは感性を育てる大事な材料になると期待しています。

第８は学習集団では一人一役ということ。班でなにかをやる場合の鉄則は一人一役ということです。だれもがおちこぼれないように何かやるということに気を配ることが大切です。

第９に支持的風土をつくること。これは社会心理学のことばでありますが，身構えて攻撃し合う防衛的風土ではなくて，信頼し励まし合う雰囲気を言います。

第10は教師自らの感性を研ぎすましてゆかなければなりません。最後は教師論にゆきつきます。

どれだけ家庭科と関係があり，お役に立ったかどうか反省しつつ申し上げました。（ここで「鶴屋南北」の研究上の体験談があったが略する）ともすれば忘れがちな感性を今復権しなければ，文明全体が，豊かな日本全体が，なしくずしになると大仰に思うのでございます。（文責　福田公子）

《研究室から》

家庭科男女共学の支援センターとして

島根大学教育学部　多々納道子

新教育課程では，教育改革への様々な取り組みが行われたが，高校段階までの家庭科の男女必修化は画期的なものである。特に，高校での男女必修は，家庭科発足以来初めての取り組みであり，実施にあたってハード面では施設・設備の改善，適正な教員配置および教員研修の充実，ソフト面では教育内容や方法の研究等の課題がある。

これらの課題解決には，行政を含めて家庭科教育関係者が一致協力し，全力をあげて取り組まねばならないことは当然である。

平成３年10月の島根県高校家庭科教育研究大会での研究授業は，男女共学で「高齢者の生活と福祉」について実施された。担当は教職２年目の若い教師であったが，私はこの授業によって，男女共学への確かな手ごたえを感ずることが出来た。そして，あらためて男女必修のための条件整備の重要性を痛感した。

私自身も微力ながら，ハード面の整備は県レベルの各種委員会を通して行政へ働きかける一方，ソフト面では男女共学の理論と実践の結合を図る基礎的な研究に取り組んでいるところである。

ところで，新教育課程でこれまで以上に重視されてきた消費者教育に対しては，アメリカのリソースセンターにならって，平成２年に消費者教育支援センターが設置された。また，各県にある消費者センター（消費生活センター）は，地域における消費者教育の実施センターや支援センターとしての役割が期待されている。このように，新しい教育の実施には，それを支える組織が必要である。

男女必修家庭科の実施においては，家庭科教員養成を担当している各大学の家政研究室が，支援センターの役割を果たすことが出来ればと願っている次第である。

《学校現場より》

男女共学による保育学習の取り組み

鳥取県東伯町立東伯中学校
教 諭　宮川眞利子

長年勤務した小学校から中学校に赴任したとき，技術・家庭科（家庭系列）の指導内容にしめる技術指導の多さに驚くと同時にその重要さに気づきました。

そこで取り組んだ研究テーマが「被服領域における個に応じる問題解決の指導」で，第1報「被服指導の問題点に関する一考察」，第2報「問題解決過程における生徒の意識の変容を通して」，第3報「形成的評価を導入して」，第4報「形成的評価を導入してⅡ」として，全国理科教育センター研究協議会技術・家庭科部会研究発表会や鳥取県教育研修センター研究紀要に発表してきました。

しかし，技術指導だけでなく，生徒の生き方に関する指導にも力を入れたいと考え，「幼児に対する関心を高める」こと，「自分を今日まで育ててくださった方々に感謝の気持ちを持つ」こと，「自分のこれからの人生設計をする」ことを学習目標にして生徒指導に重点を置いた「男女共学による保育学習」に取り組みました。

幸いなことに長年勤務した小学校と同じ町内の中学校に赴任しましたので，保育園・幼稚園・小学校連絡協議会を通して旧知の保育園や幼稚園のご協力をいただき，保育園・幼稚園訪問を指導計画に取り込むことができました。そのため，教室での学習と保育園・幼稚園での幼児とのふれあい体験をうまく組み合わせることができ，家庭科ならではの学習が組織できたと考えています。

第1年次（昭和61年度）の3学期の取り組みは家政教育社発行月刊教育雑誌『家政科教育』第62巻13号に掲載されましたのでご覧いただければ幸いです。第3年次（平成3年度）は幼児と一対一の関わりを試み，今までにない学習効果が上がったと感じております。

《環境教育関連資料紹介》

共同研究に関連する文献書を紹介いたします。書名，発行所，単価の順に記載してあります。

○『総合教育技術10月号増刊　環境教育ガイド'91～'92』小学館　950円
○『UTAN「驚異の科学」シリーズ6　今「ゴミ」が危ない』学研　1,200円
○『アサヒグラフ増刊　リサイクル大図鑑』朝日新聞社　1,150円
○『子どもにどんな地球を残しますか』福武書店　1,200円
○『地球は救える～環境保護へのシナリオ』小学館　2,200円
○『地球となかよく暮らす本』ファンハウス　1,300円
○『地球を救え』岩波書店　2,427円
○『地球を救う133の方法』家の光協会　1,300円
○『地球にやさしいライフスタイル』第一法規出版　1,200円
○『子どもたちが地球を救う50の方法』ブロンズ新社　1,200円
○『豊かさとリサイクル　省資源，省エネルギー生活推進研究会報告』大蔵省印刷局　990円
○『恐るべき酸性雨　水と緑を破壊する複合汚染』合同出版　1,350円
○『世界のすてきなごみ仲間　ごみと地球と人間と』日報　1,380円
○『ごみから地球を考える』岩波ジュニア新書　600円
○『地球をこわさない生き方の本』岩波ジュニア新書　600円
○『授業づくりネットワーク増刊　環境教育・授業記録集1』学事出版　980円
○『授業づくりネットワーク』1991年11月号，12月号　学事出版　各580円
○『授業づくりネットワーク増刊　環境教育・授業記録集[1]』1992年3月　学事出版　980円

《研究発表要旨》
研究発表　０１

Lake Placid Conferencesにおける中等学校のカリキュラム構想

広島大学大学院　　森　　尚　子

１，研究目的

アメリカの家庭科教育を成立させたのは、周知のように、1899年から1908年までの10年間にわたり開催されたレイクプラシッド会議（Lake Placid Conferences，以下、L.P.C.と略）である。この間、L.P.C.は、中等学校の家庭科のカリキュラムについて検討し、構想を打ち立てようとした。このカリキュラムは、学校教育段階にあわせて検討された家庭科の最初のカリキュラムであるといえる。

本発表では、この初期のカリキュラム構想を検討し、成立期における家庭科教育の性格、特色を明らかにすることを目的とした。これは、家庭科の本質を探るうえからも、また、今後の家庭科にも示唆するものを与えると考えるからである。

２，研究方法

L.P.C.の議事録（Lake Placid Conferences on Home Economics）、全米教育協会（以下、N.E.A.と略）の議事録（Journal of Proceedings and Addresses）の分析を中心とする。

対象とする期間は、L.P.C.が開催されていた1899年から1908年までの10年間とする。

３，結果・考察

L.P.C.で構想された中等学校の家庭科のカリキュラムは、はじめは科学を中心としたものとして構想されており、ハンドワークについては、科学的な実習をおこなう際に若干使用するといった二義的なものとしてとらえられ、あまり念頭におかれていたものではなかった。しかし、1902年（第４回L.P.C.）、N.E.A.が、L.P.C.の提示している家庭科と科学との関係を否定し、家庭科をハンドワークと関わる教科としてとらえたので、その後、L.P.C.ではハンドワークについて検討し、カリキュラムをつくっていく。このときのハンドワークとは、プラクティスとして捉えただけではなく、これ自体に教育的価値を認め、また、職業的な意義をも見いだしたものであった。1907年、再び、L.P.C.で、E.H.Richardsが、理論と実践の間に科学を取り入れることを指摘し、生活をよくするには、知識を応用する能力ではなく、応用するための基礎知識が必要であるとし、基礎科目を重視するという意味で、科学教育との関わりあいを再主張する。また、家庭科を女子に理解しやすい女子用科学として捉え、科学として価値があるものとして位置づけた。そして、家庭科教育の内容の統一、カレッジ入学必要要件、普通教科(common body of subject)の視点から検討をし、カリキュラムをつくっていく。それは、科学を中心としたハウスホールド・サイエンスと、技術・文学・科学・芸術と関わらせたドメスティック・アーツコースであった。このマニュアル系をどう位置づけ、取り組んでいくかは次代へとゆだねられた課題であった。

高等学校消費者教育内容の実態分析 ―― 環境教育の視点より ――

広島大学大学院　　今村 祥子

【研究目的】　今回初めて文部省から提示された環境教育指導資料（1991.6）では，高等学校家庭科においては消費者教育と環境教育の関わりが特に強調されている。即ち，高等学校家庭科における消費者教育に，環境調和的・総合的観点の積極的導入が求められている。本研究は，高等学校家庭科教師にみるエコロジカルな（生態学的・環境調和的）視点に立つ消費者教育内容の実態分析を通してその現状把握を試み，環境教育の観点に立つ消費者教育充実のための指針の提示およびそのカリキュラム化の一助とすることを目的とする。

【調査の概要】　調査対象は中国・四国９県および兵庫県，合わせて10県の高等学校家庭科担当教師。調査方法は調査用紙（往復はがき）の郵送による記入依頼調査で，配布数 642，回収数 179，回収率約28%。調査期間は1990年11月～12月。

【調査結果・考察】　列挙された領域別内容数の割合は家庭経営（16%），被服（約19%），食物（約26%），住居（19%），保育（約17%）で，内容数の領域による偏りは顕著ではない。さらにａ～ｋの11の視点：［ａ生活の基本的価値，ｂ家庭生活と環境との相互作用，ｃ地球環境問題・社会問題等，および環境を配慮した家庭生活（ｄ全体，ｅごみ，ｆ水，ｇエネルギー，ｈ衣生活，ｉ食生活，ｊ住生活，ｋ保育生活）］に基づき分類，分析を行った結果，「ごみ」に関する内容が最も多く，全内容数の約23%を占め，いずれの領域においても積極的に取り上げられている。次いで「水」（特に合成洗剤と関連して）および「食生活」（特に農薬や食品添加物等，食品の安全性に関わる内容）もそれぞれ約14%と多い。「ごみ」「水」「エネルギー」等のキーワードに基づき家政教育価値としてのキーコンセプトを設定することにより，自己の生活と身近な環境との関わりに対する感受性が高められ，洗剤やリサイクル，環境破壊の仕組み等，単なる知識のひとり歩きを防ぐことができると思われる。即ち，個々の知識が“地球にやさしい消費生活の在り方”や“地球と水とわたしたちの暮らし”というようなあらゆるものの“営み”の中で統合され，理解を実践に結び付ける学習成果が期待できるものと考える。家庭科教育においては，人間と環境との関係概念把握を通して児童・生徒にその関係性を授業の中で体験させることが求められる。

研究発表　０３

学校教育における消費者教育の課題

－　「権利を主張する消費者」の再確認　－

山口大学　教育学部　　小 島　郷 子

１　目　的

わが国においては、高度大衆消費社会の到来以後、1960年代に消費者教育の必要性が提唱され現在まで約30年が経過した。近年特に、複雑化・多様化した消費生活の中で、自らの責任と能力で経済社会の運営に関わる自覚と役割の認識をもった消費者の育成が急がれている。その意味でも消費者教育は、学校教育で展開されることの重要性が要請されてきた。

1989年告示の学習指導要領では、小・中・高等学校での消費者教育の充実が図られ、学校教育を中心とした消費者教育の時代が訪れたといっても過言ではない。しかし一方では、カリキュラムや教材・教具、教師の研修の問題など、基本的な部分での課題も多く残されている。

そこで、これからの日本社会にあって、主体性を持った消費者の育成のための教育のあり方を探ることを目的に研究を行った。特に、現在教育課題とされている「権利を主張する消費者」を育成することの意義について考える。

２　方　法

消費者教育関連論文をもとに、消費者教育の問題点と今後の課題を明確にする。さらに、日本文化における「権利意識」をアメリカのそれと比較することで明確にし、日本型消費者教育のあり方を「権利を主張する消費者」の視点から考察する。

３　結　果

1980年代、消費者教育を行って20年経過した時点で、過去の反省を込めて消費者教育に関する再検討がなされた。その内容は、欧米型消費者教育を導入することの限界と、その基礎にある消費者の権利についての認識構造の違いについて述べられているものがほとんどである。

また現在は、消費者として与えられている権利を認識し、それを行使する消費者の育成が重要な課題となっている。

権利意識を高揚させるための教育は必要ではあるが、欧米人と権利に対する意識の違いを考慮すると、わが国独自の教育課題があると考える。すなわち、アメリカを目標に権利のみを強調するのではなく、歴史的に市民としての意識が育っていない国民を対象とした教育のあり方として、「権利を主張するとともに、役割が果たせる消費者」を育成することを教育課題とする必要があることを提案する。

研究発表　０４

高等学校「家庭生活」領域に関しての授業研究
――「家庭の機能と家族関係」をより具体的に理解するための試み――

山口芸術短大（非）　　砂　田　京　子

1. 目　　的

今回の学習指導要領の改訂で、家庭一般、生活技術、生活一般の三科は、男女が学ぶ家庭科として設けられたが、それらに共通して「家庭生活」領域は大きいウェイトを持つ。

これら三科の中で、高校生達は「生活の中の自立」「男女の家庭に対する責任」「生活哲学、技術」「生活文化・福祉」という諸問題を学習して行くのであるが、その過程の初期の段階で「家庭の機能と家族関係を、正確に捕え理解して行くことは、極めて重要な事と考えられる。

ところが授業展開に当り、高校生達のこれらに対しての学習意欲、認識はあまり有るとは言えない。この現状を考慮し、彼等が「家庭」をより具体的な感覚でつかめるように、自分の育った家庭以外の家庭の姿、家族関係のさまざまな形、家事労働の考え方、老人関係の諸問題等を空間的によりたくさん認識させることは、授業するに当り重要だと考えた。又、この領域を学習して来た、従来の受身的な学習方法を改め、自然に、意欲的に学習できるように展開を組み立てる事を考慮し、この授業を試みた。

2. 方　　法

- 対　　象：山口県　宇部市立宇部女子高校１年生　　普通科女子　144名
- 実施期間：（1988年４月15日～５月10日）
- 方　　法① 1988年１月～３月までの朝日新聞テーマ談話室〝家族〟の投稿記事を抜粋し、それを主題別に分類し、冊子を用意した。（資料参照）資料は膨大であったため、又あらゆる角度から投稿を取り上げたいため取捨選択に時間をかけた。
  - ② 生徒に冊子と授業の関連を説明し、感動した所、考えさせられた所に赤鉛筆にてアンダーラインさせた。（資料№４参照）
  - ③ その中で一番印象深いものを切り取り、ノートに添付し、それについての自分の意見を述べさせた。（授業→家庭学習）。記入後にノート提出。
  - ④ 教師の気づき、感想をノートに記入し生徒へ戻し、教科書による普通の授業に戻り、最後に、実習ノート（資料№４参照）に、自分の理想とする家庭像について、各自の考えをまとめ、述べさせた。

3. 結果・考察

冊子に取り組んだ最初の時間の静けさと緊張感は特筆すべき驚異であった。過去３年間における同時期の生徒の態度には、私語、内職、居ねむり、漠然とした授業態度を示す者は否定できない存在であったが、全員指示通りに手を動かし始め、最後までその態度がくずれなかった。又提出ノートには筆圧のある字で、全員がしっかり意見を書いてくれた。さらに次からの授業にも、冊子の内容を媒介とした主体的な素直な意見が、活発に出るようになった。最も感動し、成功だったと思えたのは、実習ノートに書かれた〝理想的な家庭像〟であった。現在の自分の家庭生活の分析と反省。寮生活者の家庭への郷愁、父子・母子家庭における自分の家庭での位置づけ、平和な家庭を与えてくれる両親への感謝、祖母との二人の生活を、これを素直に感謝してくれた生徒、家事労働の平等化をさらに詳しく表現した者、とさまざまであり、長い時間をかけ生徒達の感想を読ませてもらい、この試みは有意義であったと思った。

以前にこの様な授業計画なしに、実習ノートを用いた時には、ここまでの生徒の家庭への理解度は表現されなかった。教科の興味を持たせるような授業を構造化することの大切さをこの領域でも大切だと考えさせられた。

研究発表　０５

中学校家庭科「私の成長と家族」の授業開発

岡山県赤磐郡吉井町立吉井中学校　福　園　恵
岡山大学教育学部　佐　藤　園

１．目的

本校の生徒には、思春期をむかえると家族に反抗的になったり、友人の気持ちを思いやることができにくい傾向がある。また、欠損家庭も多く、全校生徒の約１割を占めている。現実に家族とのかかわりが持てない者も多い。思春期をむかえ、自我が確立する時期に、より良い生徒の成長を保障するために、家族やその他の人々とのかかわりが、現在の自分の成長に大きく関係していることを再認識させ、人とかかわる力をつけさせると共に、自分の人間関係のあり方を考えさせることを目的とした授業を創りたいと考えた。

２．方法

本会共同研究「小・中・高校における「家庭生活」に関わる領域の教材開発と授業研究」の一環として、岡山県で開発された「小学校家庭科「わたしの成長と家族」の教授書試案」に基づいて、本校１年生（３クラス、男子３７名、女子４６名）を対象に男女共学で授業を行い、その結果に基づいて、問題点を抽出し、中学校家庭科「私の成長と家族」の授　業開発の示唆を得た。

３．結果

授業中に生徒が書いた感想や自分の考えから、多くの者は、自分の成長には家族を中心とした人々とのかかわりが重要であることを理解したことが明らかになった。しかし、授業で用いた教材、授業の展開の方法などにいくらかの問題点も見い出された。

研究発表　０６

青年前期における親子相互作用

広島文教女子大学短期大学部　　長石　啓子
伊藤ひろみ

１．目的

新学習指導要領の全面実施を平成５年度に控えて、移行の研究に多忙な昨今である。重要な改訂点の一つである新設「家庭生活」領域中の指導事項である〃家族の生活と家族関係について考えさせ〃　〃家庭の仕事について指導する〃の基礎資料となることを目的として、家族関係の中の親子関係につき、宮川満氏の親子相互関係の研究を先行研究に、日常生活の８場面における親子の相互関係　即ち、親の働きかけ、それに対する子の対応、そして子の親への期待の実態を子の側からとらえ、成熟度とのかかわりから望ましい親子関係のありかたを求めた。

２．方法

調査対象　山口県中学校　広島県中学校　各２校
　　１、２、３年生男女　３１２名　とその父親、及び母親
調査期間　１９９０年　６月（山口）　９月（広島）
調査方法　父、母、子の三者へ学校を通して　①身の回りの整頓が悪いとき　②親に対して乱暴な言葉を使ったとき　③テストの成績が悪いとき　④勉強を怠けているとき　⑤帰りが遅くなったとき　⑥学校へ持って行くものを家に忘れたとき　⑦友達づきあい　⑧手伝い　の各場面における親子関係の現状、及び子へ成熟度をアンケート調査し、コンピュータ処理

３．結果・考察

〈家族との関係〉

１）様々な親子関係がみられる中で、児童期に主要な関係であった「親の支配・受容的働きかけ－子の従順な対応－親の支配・受容を期待」に代表されるような、親の主導と子の依存を軸として親子間にくいちがいの少ない安定した関係が、中学生段階では子の側からくずれ始め、親離れが始まっている。
２）この親離れは、行動面よりも意識面に無干渉期待の増加としてみられ、母子間よりも父子間に顕著である。
３）「友達づきあい」のような独自の生活領域では、著しく親離れが進行している。
４）上記２）３）の親子関係の変化は成熟度からみて望ましい親子関係と言える。
５）子の自立は、子独自の生活領域から学年進行と共に家庭外領域へと波及していく。

〈家庭の仕事〉

家庭の仕事に関する手伝いの場面では、親の働きかけを支配的であると受け止めて、受容的にしぶしぶ対応し、親に無干渉を期待している子が多い。この様な実態の中学生に、家庭の仕事について学習させることの困難さを痛感する。

研究発表　０７

アメリカ家政学会誌における障害児教育研究の動向

広島大学学校教育学部
伊藤　圭子

１．目　的

アメリカにおいては、1975年に全障害児教育法が制定され、ハンディキャップを持つすべての子どもが、最も制約が少ない環境のもとで、無償で十分配慮された公教育を受ける権利が保障された。これにより、就学形態は統合教育が障害児教育の主流となりつつある。この法によれば、「個別教育計画」（IEP）の作成が義務づけられており、個々の特性に応じた生活中心の指導が実践されている。そのため、家庭科教師の障害児教育における役割、責任も増大している。

一方日本においては、1979年の養護学校義務制の施行から約10年を経て、統合教育への動きも見られるが、ＩＥＰのような教育計画プログラミングの確立までには至っていない。また、養護学校においては、特に生活の自立を目標とする家庭科は重視されてはいるが、個々の特性に応じた教育はいかにあるべきかを模索しているのが現状であり、教育内容・方法、設備など多くの問題を内包している。

そこで、アメリカにおける家庭科に関わる障害児教育研究の動向を把握することによって、日本の家庭科における障害児教育の方向を探索する際の示唆を得ることを目的とする。

２．方　法

アメリカにおける家庭科教育に関わる学会誌として、『JOURNAL OF HOUME ECONOMICS』、『HOME ECONOMICS RESEARCH JOURNAL』、『ILLINOIS TEACHER OF HOME ECONOMICS』における障害児教育に関する掲載論文を分析した。期間は、リハビリテーション法が制定される５年前の1968年から1990年までを検討した。

３．結　果

(1)　障害児教育に関する論文は、障害者に関わる法律（リハビリテーション法、全障害児教育法）の制定に伴って多くなり、1981年の国際障害者年前後に特に増加する傾向にあった。

(2)　掲載論文の内容は、リハビリテーションに関するものが多く、それは、ノーマライゼイションの思想に基づくものであり、Schwab氏の「障害者が自立した生活を送るためのリハビリテーションは、―(省)―地域または社会で働ける人生へと導く最良の方法である。」の論に代表される。中でも、リハビリテーションにおける家政学出身者の役割の重要性について論じているものが多かった。

(3)　家庭科授業に関しては、学習者の教育上のニーズに応じた指導方法・評価方法等についての実践的研究がみられた。例えば精神薄弱児の場合、効果的発問の仕方、絵カード・カセットテープレコーダーなどの指導媒体の有効性に関する検証がなされている。

【新入会員】

鳥取県

氏名	〒	住所（自宅または連絡先）	TEL	勤務先	TEL
石川　行弘	689-02	鳥取市美萩野２－36	0857-59-0798	鳥取大学教育学部	0857-28-0321
伊藤　紀子	689-23	鳥取県東伯郡東伯町逢東560	0858-52-2830	鳥取大学教育学部	0857-28-0321
堤　伸子	680	鳥取市湖山町南５－155－202	0857-28-6325	鳥取大学教育学部	0857-28-0321

島根県

猪野　郁子	690	松江市西川津町3401－14	0852-23-5211	島根大学教育学部	0852-21-7100

岡山県

渡辺美智子	700	岡山市中撫川597－58	0862-93-3726	岡山市立妹尾小学校	
福國　恵	709-15	岡山県和気郡佐伯町谷田158	0869-88-1212	赤磐郡吉井町立吉井中学校	

広島県

三河　知子	734	広島市南区東雲本町３丁目２－26 レーベンス東雲203号		広島大学学校教育学部大学院	
丸尾　譲	733	広島市西区己斐東２丁目18－16	082-272-2684	広島大学学校教育学部	082-281-3141
地井　昭夫	731-51	広島市佐伯区隈の浜２－４－７－302	0829-23-2684	広島大学学校教育学部	082-281-3141
福田真理子	731-02	広島市安佐北区可部９丁目23－９	082-815-3091		
正坊地美智子	731-02	広島市安佐北区落合南４丁目21－９		広島市立川内小学校	
森富　恵	731-01	広島市安佐南区上安町2053－３	082-872-1578	広島大学附属東雲小学校	082-281-3141
宮里　智恵	723-01	三原市沼田東町末広315－84	0848-66-2141	広島大学附属三原小学校	0848-62-4238
河本　秀子	733	広島市西区楠木町１丁目４－22	082-293-0683	広島第一女子商業高校	
竹ノ中妙子	729-01	広島県甲奴郡甲奴町福田320－１	084767-2746	甲奴町立甲奴中学校	
成長　克子	731-05	広島県高田郡吉田町吉田768－１	08264-2-2653	広島皆実高校	
中尾　雅美	731-01	広島市安佐南区相田５丁目11－５		広島県進徳女子高校	

本部だより

1991年6月29，30日に日本家庭科教育学会第34回大会が国立教育会館で開催されました。

53件の研究発表・東京大学環境安全センター・工学系大学院都市工学専攻課程助教授中西準子氏の講演「水汚染と生活」，総会などがありました。

役員は留任です。本地区会からの評議員は新任の福田公子氏が承認され，留任の田結庄と二人があたることになりました。

1991年度の例会は11月16日(土)に文化女子大学で開かれました。セミナーは1992年3月26～27日に蛇の目ミシンホールで「男女がともに学ぶ家庭科 ― 小・中・高校の一貫性の視点からみた諸問題とその対応 ― 」のテーマで開かれます。

1992年度の第35回大会は鹿児島で7月4，5日に開催されます。新しい家庭科実施に際しての実践などの発表が期待されます。

事務局だより

1　事務局が変わりました。

鳥取大学教育学部内に事務局が変わりました。住所および郵便振替口座は次のとおりです。

〒680　鳥取市湖山町南4丁目101
　　鳥取大学教育学部内
　　TEL　0857－28－0321
　　FAX　0857－28－6342
　　振替口座　松江3　27369
　　加入者名　日本家庭科教育学会
　　中国地区会

2　研究発表会について

第12回研究発表会並びに総会は，**1992年8月22日(土)岡山大学教育学部で開催**されます。

研究発表を希望されます方は同封の研究発表申込み用紙に必要事項を記入して，**5月11日(土)**までに，

〒700　岡山市津島中3－1－1
　　岡山大学教育学部
　　笠井研究室　あてにお送り下さい。

会員の皆様の多数の参加をお願いいたします。

3　地区会費の納入について

1992年度の地区会費を同封の振替用紙でご送金下さい。1991年度あるいはそれ以前の会費を未納の方はあわせて納入くださるようお願いいたします。

年会費　1,000円

4　1992年3月に名簿を発行いたしました。

住所，勤務先の変更のある方は，下記事務局までお知らせいただきたいと存じます。

〒680　鳥取市湖山町南4丁目101
　　鳥取大学教育学部内
　　日本家庭科教育学会中国地区会
　　事務局

編集後記

会報第12号をお届けいたします。片岡先生の講演要旨を福田公子先生がテープおこしをして下さり，当日の熱気が伝わってきます。また，ご多忙のところ，ご執筆いただきました諸先生方に感謝いたします。

「生活環境にかかわる教材開発」の共同研究も軌道に乗ってきました。会員の皆様の更なるご協力をお願い申し上げます。（田結庄）